藤岡市上栗須遺跡出土の刀装具について

斎藤利昭・木津博明

1．はじめに

本稿は、平成元年に筆者が編集した、当団発刊の前橋・長瀞線調査報告書『上栗須遺跡・下大塚遺跡・中大塚遺跡』で未掲載となった資料を紹介し報告を補うものである。

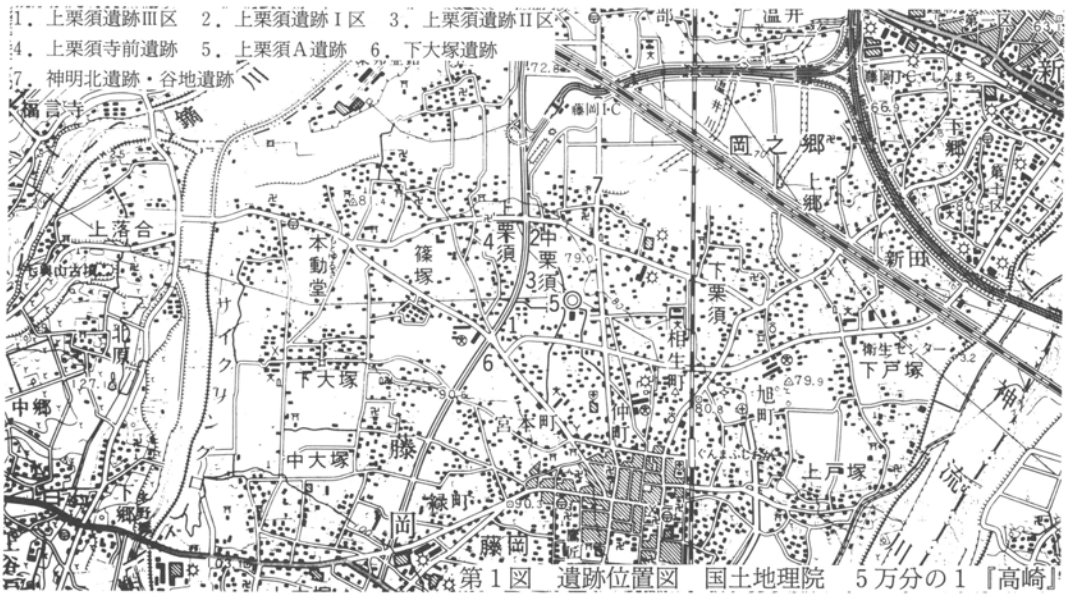
ここで紹介する資料は、上栗須遺跡III区（上栗須字岡前）14号住居跡出土遺物の金銅製宝相華文魚々子文足金物である。稿中では、本品の彫金技法や意匠等を観察・図化し、熊野堂遺跡[1]出土装飾金具及び国分寺中間地域[2]出土金銅製飾具等の県内出土類例資料等を参考に、本品の性格及び、本品の存在が示唆する側面から上栗須遺跡の性格に就いて若干の検討を行うものである。

2．遺跡の概要

本遺跡は、藤岡市街地の北西部に位置し、東西を北流する神流川、鮎川両河川の形成した開析扇状地上に立地する。遺跡周辺の地形は旧鮎川の影響により北東方向に緩やかに傾斜する。

台地上の遺跡の立地は、縁辺部に縄文時代以降の遺跡（神明北遺跡[3]、谷地遺跡[3]、寺前遺跡[4]1区等）が立地し、また方形周溝墓を含む篠塚古墳群が所在する。台地内陸部では、奈良時代以降に集落（上栗須遺跡II・III区、下大塚遺跡、上栗須A遺跡[5]等）が営まれるようになる。

本遺物を出土した上栗須遺跡III区は、7世紀後半の一辺約8m弱の大型竪穴住居跡を中心とした集落が初現であり、10世紀代まで継続して集落が営まれる。また、この集落では8世紀代に掘立柱建物跡群を構成する時期が認められ、上栗須遺跡II区の南端からIII区中央にかけて3間×4間の大型掘立柱建物跡を中心に2間×3間の掘立柱建物跡が規則性を持って配置されている。

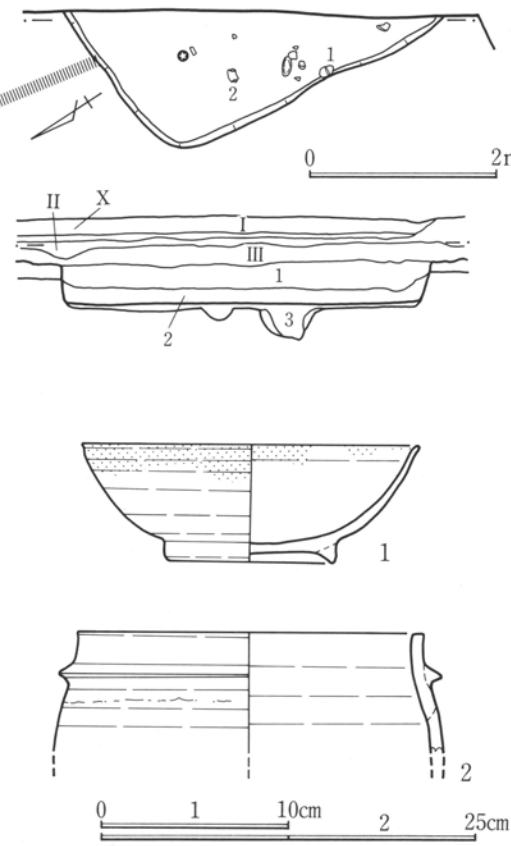


第1図　遺跡位置図　国土地理院　5万分の1『高崎』

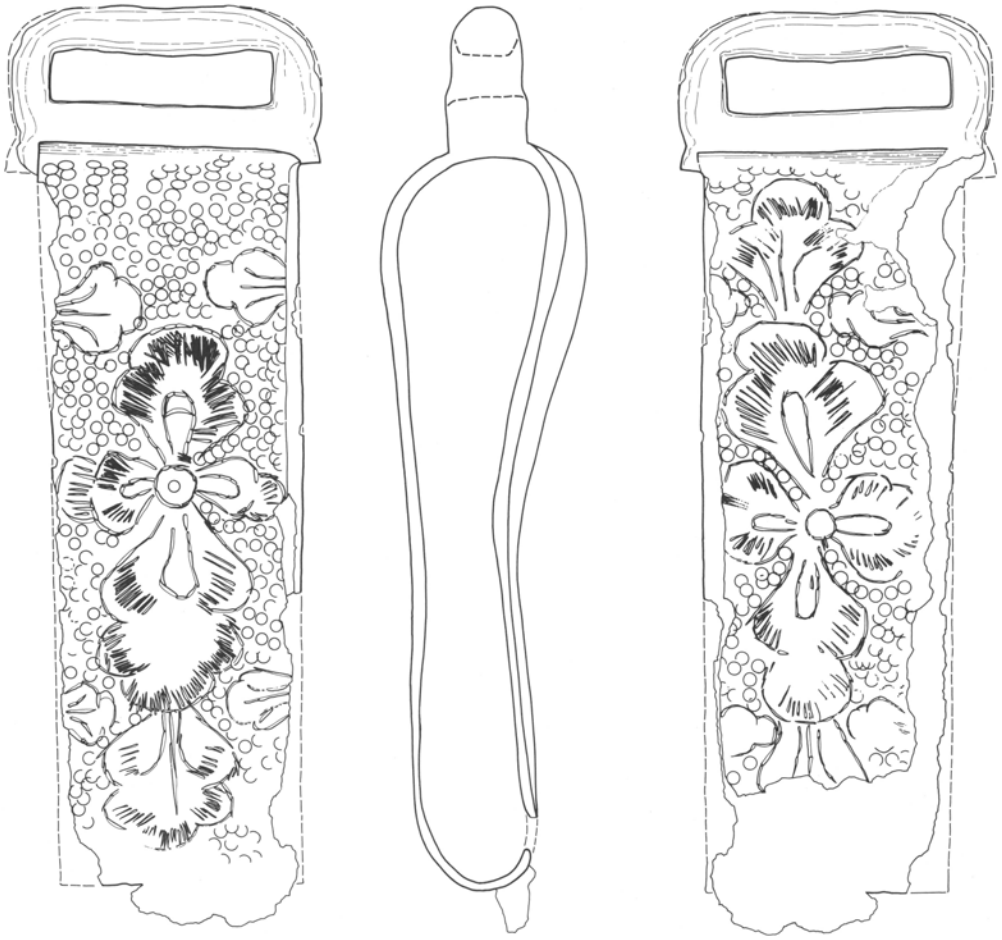
3．遺構と遺物

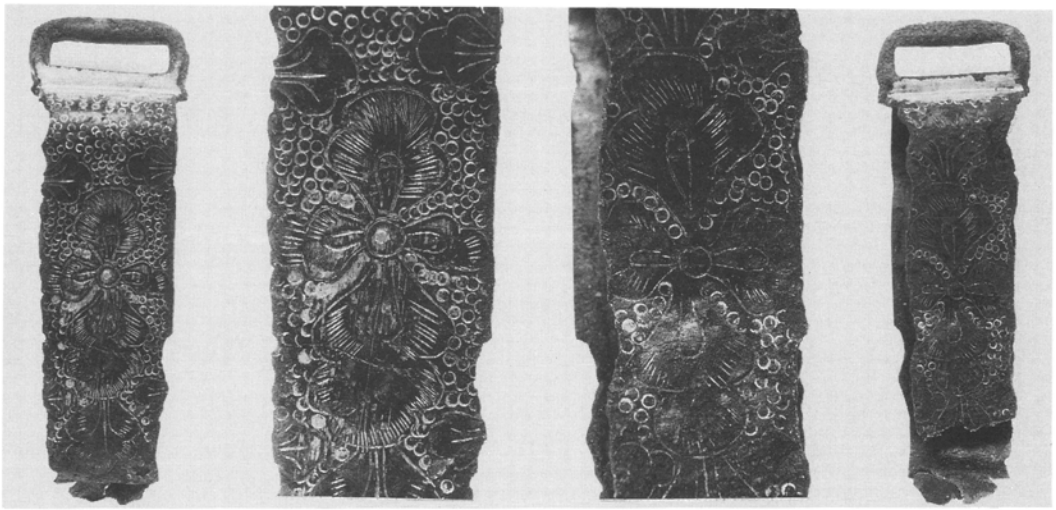
本品を出土した14号住居跡は、遺跡中央部の調査区外に伸びる。住居は約1/3のみ調査を行い、規模は西壁確認部分で約3.2m、確認面からの深さは5㎝を測る。重複は、近接する時期の10号住居の煙道部を壊し作られる。竈、貯蔵穴、柱穴等の施設は未確認である。本品は住居北西隅の床面より単品で出土し、共伴遺物には灰釉陶器椀と羽釜がある。灰釉陶器は口径17.6㎝、器高6.2㎝を測り、やや大型の椀である。体部は丸味を持ち口縁部に立ち上がり、口唇部は僅かに外傾する。高台部は外面は内湾気味に、内面は外傾し三日月形がやや崩れる。底裏は回転ヘラ調整。施釉は薄く口縁部に付近に浸け掛けされる。胎土は緻密で硬質であるが小砂礫を含む。特徴から大原2号窯式（10世紀前半）に対比されよう。羽釜は、口径22.2㎝を測り、口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部は平坦面を作る。鍔は貼付け後轆轤回転ナデが施される。

第2図　上栗須遺跡Ⅲ区　全体図



第3図　14号住居跡平面図・出土遺物図





第４図　14号住居出土力装具実測図（×２）及び遺物写真

4．金銅製宝相華魚々子文足金物

本品は、前項で記述のあった上栗須遺跡III区第14号住居跡の床面直上より出土している。

遺存状態は、全体に錆化は顕著ではないが、部分的に旧状を著しく失っている。帯執の通孔部では、外縁が軽微な錆化により旧状を幾分か逸しているが、内縁部は、錆化が認められるもののほぼ旧状を呈し、基部周辺は、塗金も鮮やかに遺存している。鞘部側では、下端部に著しく腐食し、片面の縁辺も同様な状態があるものの、反対側の面は比較的遺存が良好である。だが、鞘部側の塗金の残存は文様の窪んだ部分にのみ遺存し、平面的な遺存は悪い。

大きさは、通高5.750cmを測り、帯執の通孔部は、幅2.005cm・重ね0.355cm・高0.920cmを測る。鞘部側は、幅1.680cm・高4.830cm・厚0.950cmを測り、鞘の重ねを復元すると1.05cmである。(計測は、日本工業規格１級ノギスを使用)

形状は、帯執の通孔部には、鞘側寄りに刳り込みを施しており、形状を丸味の帯びた状態を表出させている。鞘部側では、縁辺部に面取りを行っている。

作りは、鞘部側と帯執側の熱圧着によると考えられ、鞘部側では、１枚の銅板を下端を中心として丸くし、上端側の帯執部側の熱圧着部で接合する状態であって、鞘部側と帯執部側の接合部は、鞘部側の接合も兼ねた状態となっている。尚、文様の施文は、この熱圧着成形後である。

文様は、主文様に宝相華文を配し、間隙に魚々子を配している。宝相華文は、表裏での均整がとれておらず、第４図の実測図右側は、全体的に中心位置が左に偏在している。文様の表出技法は、非常に細かく尖った鏨先で小単位に連打する毛彫りで、１回の鏨による表出長は均一ではなく、全体的にばらつきが目立っている。

魚々子は、基本的に二者の施文がある。一つは、宝相華文の間隙を縦列に充填するもの。今一つは、幾分広い部分をアトランダムに縦列連打するもので、後者の傾向は、第４図の左側で顕著に認められる。又、両面には、銅版状段階での研ぎによる数条の「ヒケ傷」が縦位に認められる。

又、文様の割り付け状態と姿から図上左面図が佩表側になると思われる。

県下に於ける宝相華文及び魚々子文の既存類例として、上野国分僧寺・尼寺中間地域（以下中間地域と略称）Ｄ区14号住居例[6]・Ｃ区140号住居例[7]・Ｉ区210号土坑例[8]、鳥羽遺跡Ｌ区78号住居例[9]、熊野堂遺跡49号住居例[10]４点の合計８例の類例が挙げられる。この類例は孰れも仏具乃至仏器に係わる部分的な遺物であるが、意匠・技法等を対比し得るものである。

熊野堂49号住居例は、文様全体が均整が良くとれており、毛彫りの状態は均等で極小単位に丁寧な鏨運びをしている。然し、本例を含め中間地域Ｄ区14住居・Ｃ区140号住居・鳥羽Ｌ区78号住居例は、孰れも鏨運びは統一性の無い乱雑な状態である。そして、前者の宝相華文は伸びらかであるのに対し、本例及中間地域Ｃ区140号住居例は伸びらかさの無い意匠化されたものである。又、魚々子では、中間地域Ｉ区210号土坑例が最も細かなものであり、熊野堂例を除く類例は、ほぼ同程度の大きさの魚々子で１回の施文動作は１・２・３～４点の打ち込みが主体的な施文である。

本品の宝相華文及び魚々子文は、中間地域Ｃ区140号住居例に類する状況が看取される。この状

況は、品位・所産時期・工人（工房）等未解明不分明の基本的問題の中に内在しており、今後に託する部分が多大であり類例等の増加を待って再考を必要とする。

5．お わ り に

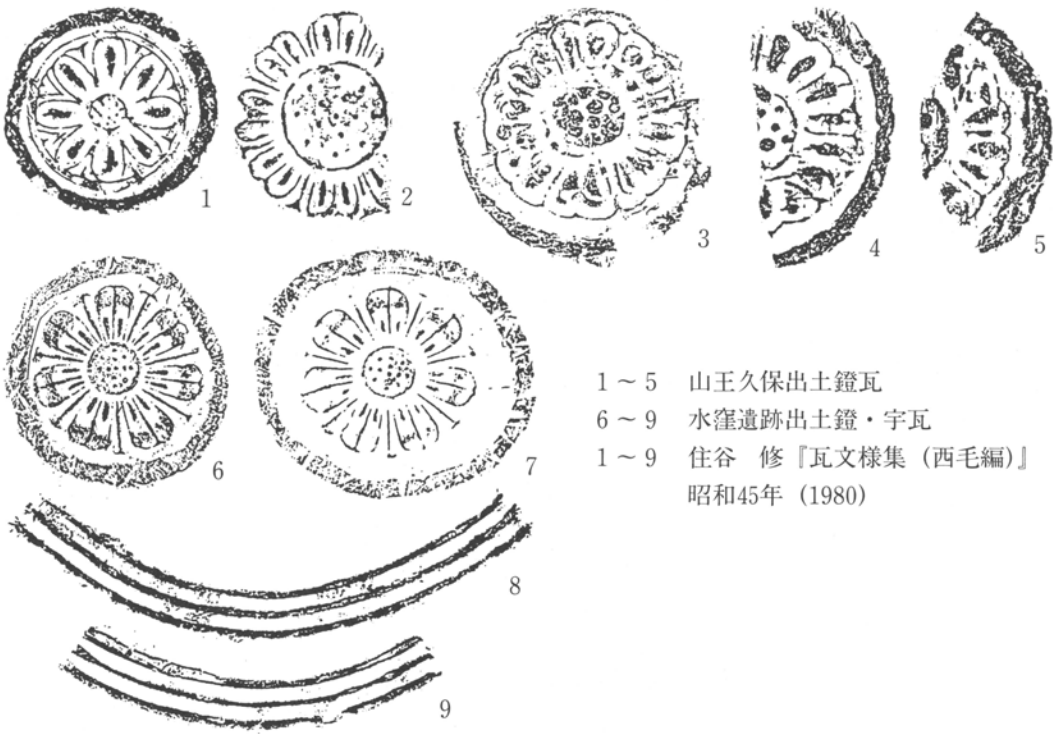
本品の遺跡内での存在は、単に住居内出土遺物として片付けられるものではなく、遺跡の特殊性を内包する遺物であると考えられる。以下、本品の出土状態や本遺跡内の遺構配置及び周辺遺跡の検討を行う中で遺跡の性格等について列記しまとめとしたい。

本品の製作年代については、10世紀前半の灰釉陶器が共伴する住居内出土遺物ではあるが、宝相華文の意匠化した段階として製作年代は9世紀代に推定される。

本品の使用については、本品が金銅製宝相華魚々子文の装飾が施されている足金物であることから、儀仗用に使用された大刀であろうと考えられる。

本品の所有形態については、住居内出土遺物ではあるが単体での出土であり、住居が完掘されていない現状では把握できない。

上栗須Ⅲ区における遺構の配置は、路線内の他の遺跡と比較した場合に各時期とも整然と配され、竈位置・主軸方向・棟方向に統一性が伺われる。7世紀代の初期集落では、路線内最大の竪穴住居跡を中心とした竪穴住居群が遺跡北寄りに位置し、8世紀以降はこの大型竪穴住居跡周辺



1～5　山王久保出土鐙瓦
6～9　水窪遺跡出土鐙・宇瓦
1～9　住谷　修『瓦文様集（西毛編）』昭和45年（1980）

第5図　山王久保・水窪遺跡出土瓦拓影図（1：5）

に掘立柱建物跡群が配される。この掘立柱建物跡群は北辺を柵列で区切り、3間×4間のやや大きめの掘立柱建物跡と2間×3間の庇を持つ掘立柱建物跡等が建てられ、部分的には掘り変えの柱穴も見られる。また、掘立柱建物跡群とほぼ同時期の竪穴住居跡群は、遺跡中央部から南に展開し、鉤の手状の直線的配列がこの竪穴住居跡群に見られる。

当遺跡の南に所在する下大塚遺跡では、東西方向の溝中より重弧文宇瓦片が出土しており、隣接する山王久保（三ノ久保）では同様の重弧文宇瓦と複弁八葉文（第5図参照）の軒丸瓦を出土しており、8世紀初頭には謂所「山王・秋間系鐙瓦」を葺く水窪遺跡（寺院跡）も至近の位置関係にある。また、同遺跡には、路線内最大規模の布掘りを有する3間×4間総柱掘立柱建物跡が検出されている。そして、路線に隣接する寺前遺跡では大規模な掘立柱建物跡が多く検出されており、藤岡市内の遺跡では当遺跡を含め特殊な状況が当該地域周辺に集中する傾向が窺える。

本遺跡を含めバイパス路線内及び周辺遺跡では、7世紀以降に集落が出現するが、それ以前の集落の存在は確認されていない。このことは、遺跡周辺部が鮎川扇状地形成時の名残りである砂礫層の発達により保水力が弱く、これにより生活水や水田耕作等には溝等の水利施設を必要とした地域であり、7世紀以前に集落の形成が無いことは、当遺跡地が未開発地域であったことが想起される。

以上のことから当遺跡は7世紀以降に集落が始まり、8世紀代には水窪・山王久保遺跡の存在から窺えるような緑埜郡内でも中心的な地域と考えられ、本品はこの特殊な状況下での存在であることが明らかであろう。そして、この特殊な要件を満たす要素として8～9世紀に継続的に突出した地域、即、官衙（緑埜郡衙？）等（富豪層の館）の存在が示唆されるところである。

最後に、本資料が報告書未掲載となってしまったことについてお詫びするとともに、小稿を草するにあたり、大江正行、神谷佳明、山口逸弘の各氏から多くのご指導・ご教示を頂き、末筆ながら記して感謝いたします。

註

(1) 『熊野堂遺跡(2)』　上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書第14集群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
(2) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(4)』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990
(3) 『C7神明北遺跡・C8谷地遺跡』　藤岡市教育委員会　1987
(4) 『年報　8』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1989
(5) 『年報　9』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990
(6) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(3)』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1988
(7) 前掲註2
(8) 『上野国分僧寺・尼寺中間地域(7)』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1991
(9) 『鳥羽遺跡L・M・N・O区』群馬県埋蔵文化財調査事業団　1990
(10) 前掲註1

参考文献

『正倉院の大刀外装』　宮内庁　正倉院事務所編　小学館　1977
『新版日本刀講座〈第8巻〉外装編』　後藤守一　末永雅雄　雄山閣　1968
『MUSEUM』№33,「日本の魚々子一受容と展開」中野政樹　東京国立博物館美術誌　1983
『日本の美術　刀剣　第6号』佐藤寒山　至文堂　1966
『正倉院』「魚子打ちの技術」東野治之　岩波新書42　岩波書店　1988